洗髪屋

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
洗髪屋

【Ｎコード】
Ｎ６６７０Ｖ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
デンマークの首都コペンハーゲン。この街に女の髪の毛に異様に欲情する男がいた。その男がヒッチハイクでブロンドの髪の奇麗な女を捕まえてしたこととは。夏のホラー２０１１企画作品です。実話を元にしています。

第一章

洗髪屋

デンマークの首都コペンハーゲンの話である。
この街にある男がいた。本名はわかっているがあまりにも奇怪でかつ異常な事件である為に偽名を使うことにする。その偽名はマリオ＝グワロとしておこう。
マリオはイタリア移民の子供としてスイスに生まれた。彼に異常が見られたのは十歳の頃のことである。
十歳頃といえば性的に目覚めがある頃である。彼もまた然りであり欲求の対象が出て来た。しかし問題はその欲求の対象であった。
髪の毛だ。それに異様にこだわったのである。
異性を見てまず第一にその髪を見てだ。彼は欲情を覚えた。もっと言えば髪以外のどの部分にも、顔や胸、腰に足といったものの全てに欲情を感じずにだ。彼は異性の髪だけを見たのである。
このことに気付いた周囲もだ。マリオについてこう言うのだった。
「妙な奴だな」
「ああ、女の髪だけを見ているな」
「胸は見ないのか？」
「顔は？」
「足も見ないのか」
とにかくだ。そうしたものは全く見ようとしないのだ。相手の顔や胸やそういったものもひいては職業や背丈もだ。彼は全く見ない。
とにかく髪だけを見てだ。彼は楽しんでいた。そして挙句にはだ。
彼はその欲情のままにだ。周囲にこう漏らしていた。
「俺は何時かな」
「何時か？」
「何時かっていうと？」
「奇麗にしたいんだ」

こうだ。いささか病んだ目で言ったのである。
次第に異性の髪の毛を洗う妄想ばかりしていってだ。一度は分裂症とされ精神病院に入院した。しかし退院してからトラックの運転手をしながらだ。彼は奇行に走った。
何と女と見ると声をかけてだ。髪を洗わせろと言うのである。この奇行をしていきだ。
ヒッチハイクの女性を特に引っ掛けて髪の毛を洗った。とにかく彼は髪の毛を洗えればそれで満足だったのである。それこそが彼にとっては性的欲求でありそれの解消手段であったのだ。
彼を知る者はこの奇行に目を顰めさせた。それでだ。
また精神病院に入院させようと思った。そうしなければまた恐ろしいことだけをしかねないと思ったからだ。それで何とか入院させようと動きはじめた。だがそれは残念だが遅かった。
彼はその前にだ。してしまったのだ。
ある日ヒッチハイカーの、名前をエリザとしておこう。このヒッチハイクの旅人を見つけてだ。車の中からこう声をかけたのだ。
「あんたヒッチハイクしてるんだよな」
「ええ、そうよ」
エリザは彼に気さくに答えた。見れば奇麗な長い髪をしている。マリオはそれを見て声をかけたのである。
「ぢょっとね。コペンハーゲンまで行くのよ」
「ああ、それならな」
エリザの話を聞いてだ。マリオはすぐにこう言ってきた。
「そこまで乗せていってやろうか？」
「いいの？」
「俺もコペンハーゲンまで行く途中だしな」
笑顔でエリザに話すのだった。屈託のない笑顔で。
「それだとな。ただしな」
「ただし？」
「その髪の毛を洗わせてくれ」

いつもの頼みをだ。エリザにもしたのである。
「それをさせてくれたら乗せてもいいぜ」
「あら、髪の毛をなの」
「シャンプーな。それをさせてくれないか？」
「そんなのでいいの？」
エリザは思わず笑ってだ。マリオに問い返したのだった。
「それじゃあ私が一方的に得するじゃない。コペンハーゲンまで連れて行ってもらってしかもシャンプーで髪の毛を奇麗にしてくれるなんて」
「悪い条件じゃないだろ」
「それどころか最高よ」
エリザも笑顔で応える。こうしてだった。
二人は一旦マリオの部屋に行き髪を洗った。だがここでだ。
マリオは二度、三度と髪を洗うのだ。その彼にだ。
エリザは異変を感じだ。こう彼に言った。エリザは散髪屋にある椅子、あの頭を洗う為の椅子に座りそうして散髪屋にあるものそのままの洗髪用シャワーで頭を洗われていた。その中でだ。
「ちょっと、もういいわよ」
「いや、この髪は奇麗だから」
「だから。もう洗ってもらったから」
「いや、まだだ」
マリオは何かに取り憑かれた様な声で返してきた。
「まだ洗うから」
「じゃあリンスを」
「いや、リンスじゃ駄目だ」
こう言ってだ。シャンプーでエリザの見事な髪を何度も何度も洗うのだ。そしてだ。
彼女が席から立とうとする。マリオの異常さに気付き逃げようとしてだ。しかしその彼女に対して。
マリオはロープと猿轡で動けないようにして黙らせてだ。それか

ら再びだった。
髪を荒い続ける。そのうちにシャンプーが全てなくなり石鹸になりリンス、とにかく全て使ってしまった。それで諦めるかというと。
今度は蜂蜜やオリーブオイルやドレッシングだった。調味料まで使いだしたのだ。ぬるぬるとした感じの液体なら何でもだった。

第二章

エリザは最早身動き一つ取れず為されるがままだった。その彼女の髪にだ。

液体がなくなると粉の様なものまで使った。最早彼は止まらなかった。

そうして洗い続ける中でだ。

エリザは再び動きはじめた。気を取り直し何とか逃げ出そうとしたのだ。

それで必死に暴れる。マリオはその彼女に対して。

掴み掛かってだ。必死に抑えようとする。その最中だ。

首を絞めてしまい殺してしまった。気付いた時には手遅れだった。後には虚ろな、何も見ていない目になり動かないエリザがいるだけだった。

彼もこの死体、彼が殺したに他ならないそれがそのままだと危ういことはわかった。それでだ。

すぐに石膏だの何なりを買って骸をその中に埋める。家の中に埋めてそれで葬ってしまおうというのだ。

これは上手にいったように思われた。エリザは旅の途中で行方不明になった、マリオと会っていたことを見ていた者もおらず彼は危機を脱したように思われた。

ところがだ。彼はここで過ちを犯していた。

エリザの髪の毛、あまりにも奇麗で彼が執拗に洗ったそれは常に手に持ってだ。執拗に愛撫していたのである。四六時中いとおしげに髪の毛を撫でたり触ったりする彼を見てだ。周囲は不自然に思いはじめた。

「女には全く興味のない奴なのに何だ？」

「あの髪の毛誰のだ？」

「やけに奇麗な髪の毛だが」

「あいつのじゃないのはわかる」
マリオ自身はそこまで奇麗な髪を持ってはいない。しかも短い。エリザのその髪の毛とは長さも色も奇麗さもだ。全く違うのだ。
明らかに女の髪だ。誰もがそのことはわかった。
だが誰の髪の毛なのか、これが問題だった。
「女に興味がないのに女の髪の毛持ってる」
「何処で手に入れたんだ？」
「それで誰の髪の毛なんだ」
「まさか」
ここでだ。一人がふと思ったのだ。
マリオはだ。その髪の毛をだ。
何かあると撫でる。しかもその撫でる時の顔がだ。
異様にだ。偏執的な笑みを浮かべてなのだ。
それで常に撫でるのだ。それを見てだ。
職場の同僚達、とはいっても彼とは殆んど話どころか挨拶もしない彼等が不気味に思ったのだ。そうしてなのだった。
彼等はだ。密かにだ。
警察にだ。こう話したのである。
「職場の同僚ですが」
「どうも講堂がおかしいです」
「何かあるかも知れません」
こう話したのだ。
「いつも女の髪を撫でています」
「その髪の毛を何処から手に入れたのかすら謎です」
「だからそれをです」
「調べて下さい」
流石にだ。髪の毛の出所とその偏執的な笑みで撫でるのを見てだった。
彼等は警察に通報したのだ。それを受けてだ。
警察も彼をマークし調べてみた。すると。

よくヒッチハイクの女性を部屋に連れて行っていることがわかった。ここではエリザのことはわからなかったがそれでもだ。このことを不審に思いだ。
彼のことをさらに調べだ。あまりにも不審な者であると断定したのだった。
「交友関係が少な過ぎる」
「それなのにヒッチハイクの女性にはやたらと声をかける」
「しかも」
これがだ。最も気になるところだった。
「一人行方不明になっているな」
「ああ、あいつと接触した旅行客の一人が」
「それが気になるな」
このことが警察の捜査網に引っ掛かったのだ。こうしてだった。
警察は彼に任意同行を求めてだ。話を聞いた、するとその返答は実に支離滅裂でよくわからないものだった。まさに精神異常者のそれだった。
「何を言っているのかわからない」
「全くだ」
これが警察の評価だった。つまり彼は精神異常者として放免されそうになったのだ。精神異常者ではどうしようもないと想われたのだ。しかしだった。
ふとだ。取調べを、彼の部屋も対象に入れたそれをしているうちにだ。警察も気付いたのだ。
壁からだ。見事なブロンドの髪の毛が出ていることにだ。気付いたのである。
壁から髪の毛が出ていたのだ。これは普通では有り得ないことだった。それを見てだ。
警官達は無言で、しかも強張った顔で頷き合いだ。そうして。
壁をハンマーで割りその中を調べにかかった。するとだ。
そこから無惨な白骨死体が出て来た。その死体から見事なブロン

ドの毛が生えていた。見事なのは髪だけでだ。その他は白骨化しており死体に慣れた者でないと見られないようなものだった。この死体が決め手になった。

マリオは逮捕され本格的に取り調べられることになった。その中で彼はこう言ったのである。

「奇麗な髪の毛。それを洗うだけで満足できるんだ」

こうだ。俯きけたけたと笑いながら言ったのである。彼は殺人罪に問われた。

だがこの発言をはじめとした一連の狂気そのものの言葉がだ。彼を精神異常者に認定させた。確かにそうとしか思えないことであった。

しかしこのことが結果として彼を死刑台からも刑務所からも救うことになった。彼は精神異常者として精神病院に入れられだ。そこに隔離されることになった。そしてその中でだ。

「奇麗、奇麗だ・・・・・・」

虚ろな目でぶつぶつと呟きながらだ。病室、要塞の様に隔離されたその中でだ。彼はエリザの髪の毛を撫で続けるのだった。それが今の彼である。彼は今も病院の中でそうしている。

洗髪屋　　完

２０１１・７・１６

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6670v/

洗髪屋

2011年8月10日03時13分発行